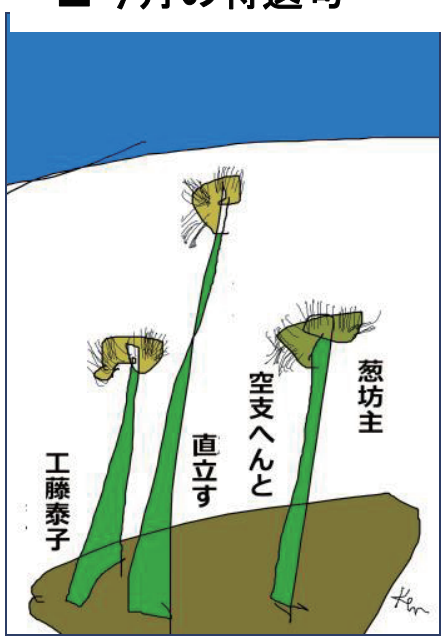
■今月の特選句

2022年4月



葱坊主空支へんと直立す

工藤泰子

葱坊主は空を支えようとしていたのか。そんな高い志があったとは知らなんだ。今度から葱坊主を見る時は敬意を払わにゃならんなあ。

ロダンの像背伸びしたくてあたたかし

田村米生

「考える人」は、ずっとあの姿勢のままでは、さぞくたびれるだろう。前屈みは寒い時季はいいが、そろそろ伸びをしたくなる頃だね。

あくびの猫ののどの奥まで春深し

吉川正紀子

あくびの口の開き具合の大きさがよく見える。猫ののどの奥まで春でいっぱいに満たされた長閑さ、平和な時間も上手く表現されている。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

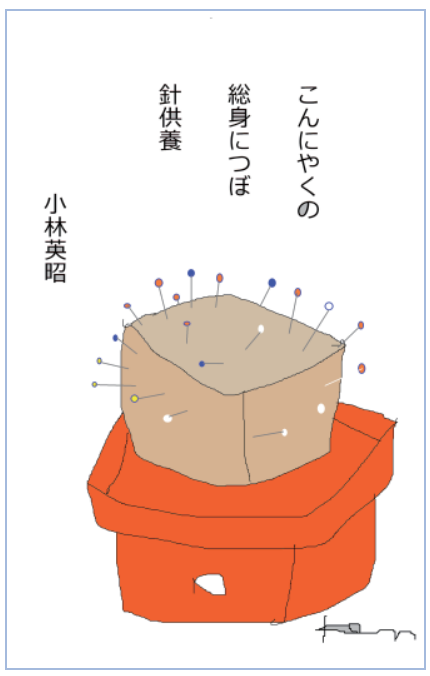
■今月の特選句

2022年4月

雪掻きや大地の背中に届きたり

北熊紀生

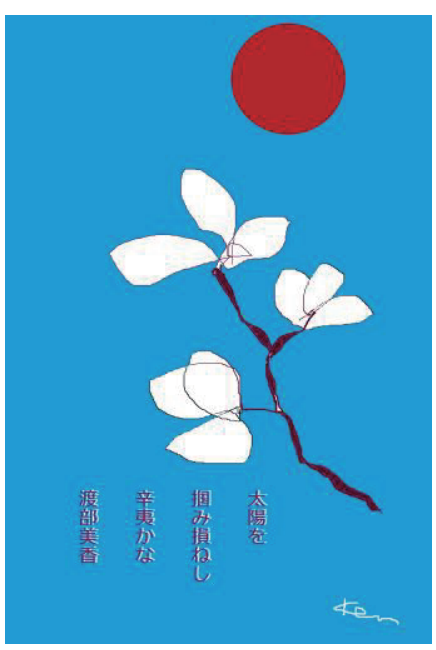
雪は冬物の分厚い洋服で、その下には大地の肌がある。さしずめ雪掻きの道具は、孫の手だね。大地は早く身軽になって呼吸がしたいだろう。



こんにやくの総身につぼ針供養

小林英昭

針供養は、硬い布などを縫ってくたびれた針の労をねぎらうもので、蒟蒻や豆腐に刺される。蒟蒻も豆腐も痛がらないのは全身つぼだったんだね。



太陽を掴み損ねし辛夷（こぶし）かな

渡部美香

蕾の形が握り拳に似ているところから名付けられた辛夷の花。花びらは指ということになるが、太陽を掴むにはやわらかく優しすぎるね。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

■今月の滑稽句

＊今月の特選句･秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

春の山犬の歩幅に綱ゆるむ	相原共良
一本の川のみ流れ深雪晴	相原共良
松の鋭く雪しんしんの天をさす	相原共良
賢者愚者煙でエンド四月馬鹿	青木輝子
人間のはっちゃけ呆れ散る桜	青木輝子
葉桜やアラフォー下り坂にあらず	青木輝子
啓蟄を探してゐたらころんじやつた	赤瀬川至安
お尻から紐の出てくる春の犬	赤瀬川至安
山笑ふどころかすつかり低気圧	赤瀬川至安
ところどころに人語をつかい恋の猫	井口夏子
迷路のごとき枝の混みあい木の芽時	井口夏子
菜の花を躍らせローカル列車行く	井口夏子
一茶泣く終の栖は雪十尺	池田亮二
欲張り風流朝寝朝酒雪月花	池田亮二
春立つや今朝から線を引くごとく	石塚柚彩
世相なりマスク姿の雛人形	石塚柚彩
雛人形展入場無料の歳となり	石塚柚彩
漕ぎ出せば水の沁み込む雪見舟	伊藤浩睦
湖に生まれ公魚鍋に死す	伊藤浩睦
亀鳴くや0．3の視力なり	稲沢進一
退屈は日日の幸せ亀鳴いて	稲沢進一
ファックスが吐き出す俳句亀鳴いて	稲沢進一
お釈迦様甘茶浴びても知らん顔	稲葉純子
立春を駆け出して行く園児かな	稲葉純子
朝帰りして平然の春の猫	稲葉純子
センサーで門灯の点く春の闇	井野ひろみ
春の雨道行く人は傘持たず	井野ひろみ
ニュース見て夫は怒るや山笑ふ	井野ひろみ
健診のご褒美として春の膳	上山美穂
ふり返る一羽もなくて鳥帰る	上山美穂
春の風吹かせて地球のオシャレかな	上山美穂
ひだまりに歌のお稽古鵙めじろ	梅野光子
春風に白のコートを欲しくつて	梅野光子
寒桜にぎはひ春の庭のごと	梅野光子
停戦の会議で握手春一番	遠藤真太郎
義勇兵に持たせたき花桜かな	遠藤真太郎

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事･写真･イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写･転載等を禁じます。

岩おさへ大中小の亀の春	大林和代
古民家に昔がそろひ梅の花	大林和代
春眠や起こされてゐる夢をみる	大林和代
しがみつくコアラずしりと春うらら	小笠原満喜恵
頬かぶりさせる余寒の畑仕事	小笠原満喜恵
初音には吉の予感や神籤引く	小笠原満喜恵
蒲公英の絮の球体平和船	岡田廣江
俳句の宿に短冊すだれ風光る	岡田廣江
長い尾の雄の燕に乗り替える	岡田廣江
木の芽和に首をかしげるおさげ髪	加藤潤子
コロナ禍のニュースに目を閉じ涅槃像	加藤潤子
御ビールと注がれて温くなりにけり	北熊紀生
水鳥やゴミ袋見ず伏目がち	木村　浩
水鳥の狙った魚かはねにけり	木村　浩
三軍で士官できそな水鳥や	木村　浩
うらめしきことは雪どけ雪女	金城正則
森羅万象詠めと声する遍路かな	金城正則
笑ってねただそれだけですスミレ草	金城正則
どれが嘘どれが本当バレンタインデー	久我正明
春一番いの一番に食うちゃんぽん	久我正明
春ならひ環状列石抜けてゆく	工藤泰子
梅東風や婆の陣取る緋毛氈	工藤泰子
初雪の軽さの嬉し今朝のこと	桑田愛子
風花はウクライナからかもしれぬ	桑田愛子
理科室の春の窓から紙飛行機	桑田愛子
春の蠅デート重ねる夢の島	小林英昭
ちんじやらを座右の音に卒業す	小林英昭
まん延防止解かれ全開杉花粉	佐野萬里子
つくしんぼ居並ぶ畑耕せり	佐野萬里子
蕗の薹摘み天婦羅に苦味添え	佐野萬里子
一張羅の白衣決め出づ雪女	壽命秀次
尾を高く挙げて恋猫凱旋す	壽命秀次
麦の芽を盗み食ひして鴨の群	壽命秀次
交番にアクリル板や冴返る	白井道義
目標を三日で破り寒明ける	白井道義
祓はれてよりはライバル受験生	白井道義

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

春潮や歴女の囲む龍馬像	鈴鹿洋子
早春の宅配便のランドセル	鈴鹿洋子
冬雲に乗せた宅配ミカンも入れてある	鈴木和枝
タオル首に巻く癖しかも魚屋のだ	鈴木和枝
酒蔵の香には負けじと花の兄	髙田敏男
聞き流す法話の数多糸ざくら	髙田敏男
初つばめ忍び返しを気にもせず	髙田敏男
いつせいのせい紅梅も白梅も	高橋きのこ
バーチャルの世界一周西行忌	高橋きのこ
有卦に入るときは危ふし花の風	竹下和宏
嘘なべてゆるされる日のプロポーズ	竹下和宏
多妻には非ず多才や花は咲く	竹下和宏
ひやとひの逆立ちするか春立ちぬ	田中　勇
悪鬼に取り憑かれしごと春の風邪	田中　勇
松の雪愛でる気も失せコロナの世	田中早苗
入選の一報受けし春の夜	田中早苗
春霞裾にあしらひ富士の山	田中晴美
甘党を誘惑春の和菓子たち	田中晴美
春の香にくんくんくんと食欲は	田中晴美
啓蟄やギャロップしてる父と子と	谷本　宴
銃声のウクライナにも春よ来い	谷本　宴
今我に足りないものは子猫だけ	谷本　宴
日脚伸ぶ腕をまくりて何もせず	田村米生
春の夜や猫にもありぬ横恋慕	田村米生
春の夢割り込む夫の無粋さよ	月城花風
口論を退け吾の花粉症	月城花風
マスクを取ればあらはになりし馬齢かな	月城花風
担任のぶるぶるしてる卒業式	土屋泰山
カップルの足からませる春炬燵	土屋泰山
はひふへほ風車のまわるほへふひは	土屋泰山
春菊は活躍鍋の季節は終わっても	坪田節子
春呼ぶや羽生結弦の「春よ、来い」	坪田節子
オーボエはひだまりの音春日和	坪田節子
蔓延防止延びて又々青き踏む	飛田正勝
初花を団子目当てに訪ねけり	飛田正勝
スキー先づ末つ子が取る金メダル	飛田正勝

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

鵜馴らしを抜けて来たぞと眼が威張る	長井知則
山蔭のこんなところに忘れ雪	長井知則
曲水の面影残る古都の庭	長井知則
堰越ゆるときの饒舌春の水	名本敦子
落椿踏むしかあらず踏んでゆく	名本敦子
亀鳴くや耳朶かゆき日なりけり	名本敦子
出る土筆打たれることなく背伸びする	花岡直樹
義理チョコや毒にも薬にもなり切れず	花岡直樹
啓蟄やビールの泡もうごめきぬ	花岡直樹
未婚既婚性別問はぬ杉花粉	浜田イツミ
蛇穴を出てウクライナ危機に遇ふ	浜田イツミ
変はりゆく世界変はらずつくづくし	浜田イツミ
花杉の反乱に遇ふ鼻孔かな	久松久子
パンジーにスタッカートの雨雫	久松久子
囀に唱和してゐる誦経かな	久松久子
春浅き朝のスープの具だくさん	日根野聖子
小躍りの魚も鳥も春めけり	日根野聖子
いちにのさんラジオ体操のチューリップ	日根野聖子
春暁や居残るコロナ欠伸する	細川岩男
花時や迂闊に息もコロナの禍	細川岩男
山笑う人も笑うかコロナ去り	細川岩男
冬将軍湯に誘われて消滅す	南とんぼ
待春のとにかく笑う句会かな	南とんぼ
忘るるは脳の頓服春氷	峰崎成規
マスクすつかり忘れ蛇穴を出づ	峰崎成規
電話の向こうに子の声がする春夕べ	向田将央
譲り合ふ風呂取り合ひの春炬燵	向田将央
座布団を枕に添い寝の春うらら	向田将央
年豆を抛りて受ける鼻の穴	村松道夫
氷上のもぐもぐタイムカーリング	村松道夫
もつたいなや傘寿迎へる犬ふぐり	村松道夫
ざつくばらんや雛納の舞台裏	森岡香代子
フリーダムわらびは拳あげており	森岡香代子
かあさんのむかえまつてるのこりゆき	森岡香代子
疲れたらうに大正時代の立ちひひな	八木　健
椎茸を呼び捨てできず春子さん	八木　健
国境へ急ぐ難民着ぶくれて	八木　健

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

グランドを蹴れば蹴るだけ凍ゆるむ	八塚一青
上履きは進級できず買い替える	八塚一青
新型といつまで呼ぶの万愚節	八塚一青
ひらがなはどれもがおどけ一年生	柳　紅生
春愁ふ衝動買ひの憂さ晴らし	柳　紅生
ごめんなさいおかまいもせず鳥帰る	柳村光寛
痛いとも言わず無音で雪とける	柳村光寛
鍋の中マグマのやうな苺ジャム	山内　更
つけまつげティアラに豹柄の女雛とは	山内　更
前下がりボブの項に春の風邪	山内　更
鏡面の川を越え行く製氷車	山下正純
虫体験枯葉被って蓑虫に	山下正純
万葉人令和を生みし梅の花	山下正純
ニキビ面なんて流行らず春いちご	山田真佐子
一人静に黙食学ぶコロナの世	山田真佐子
地獄の釜の蓋より覗く独裁者	山田真佐子
文旦の五つの箱の硬さかな	山本　賜
日の射してみるみるひらく梅の花	山本　賜
声だけの鶯相手のかくれんぼ	横山洋子
立春の朝日は万能薬のごと	横山洋子
受験子を見送ってゐる爺と婆	横山洋子
地の冷気吸つたか白き梅の花	吉川正紀子
風やんでをり梅香りをり	吉川正紀子
砲声に逃れて来しか魚氷に上る	吉原瑞雲
猫の日の鼠を捕らぬ猫である	吉原瑞雲
ドーピング氷のやうに冷たい目	吉原瑞雲
うす暗き部屋に真白のひなの顔	渡部美香
甘さより皺をほめられ三宝柑	渡部美香
主治医との話題はコロナとウクライナ	和田のり子
春寒や国の暴掠赤子泣く	和田のり子
凍返る募金よ届けウクライナ	和田のり子

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。